

東南アジア史学会会報 No.36

昭和57年5月

御挨拶

会長 鈴木中正

昨年私ははからずも藤原利一郎前会長の後をうけ、第9代東南アジア史学会会長の大任を仰せつかりました。

御承知の如く最近内外の情勢は大きく変化し歴史の転換期に向かっていまして、私共はここに意を新たにして一層研究に精進し、優れた成果を挙げてアジア近隣諸国との友好増進に貢献すべきだと思います。さらには我々の研究成果が国際的水準に照して遜色のない高度のものであるよう努力せねばなりません。私は浅学微力でありますと、本学会の活動がこれらの要望にこたえうるよう努力致す所存ですので、会員諸賢兄の御支援御協力を切にお願い申し上げます。

なお私の任期中は学会の事務局を愛知大学文学部伊東利勝研究室におきますので、御忠告、御意見のむきは同事務局に活発におよせいただきたく願います。

また新委員を次の如く委嘱しましたので併せて御報告申し上げます。

第9期委員（敬称略、50音順）

明石陽至（中部大会・中部地区）、生田 滋（渉外・東京大会）、池端雪浦（関東例会）、石井 米雄（渉外）、石沢良昭（九州地区）、市川健二郎（編集）、伊東利勝（庶務・中部大会）、今永清二（中国地区）、大木 昌（庶務）、加治 明（編集）、川本邦衛（東京大会）、白鳥芳郎（渉外・編集顧問）、鈴木恒之（会計）、土屋健治（京都大会）、中村孝志（京都大会）、永積 昭（渉外）、弘末雅士（関東例会）、深見純生（関西例会）、藤澤義美（東北地区）、藤原利一郎（関西地区）、桃木至朗（関西例会）、山本達郎（渉外・編集顧問）、吉川利治（京都大会）、和田久徳（会計監査・関東地区）、和田正彦（東京大会）

選挙管理委員会報告

第8期会長の任期満了にともない、赤木 攻、土屋健治、深見純生、桃木至朗、渡辺佳成よりなる選挙管理委員会が10月に発足した。国内在住の会員による直接選挙は11月30日をもって投票が締め切られ12月4日に開票を行った結果、（総投票数96、有効投票数95）、生田 滋、石井米雄、市川健二郎、白鳥芳郎、鈴木中正、永積 昭、山本達郎（50音順）の七氏が「会長候補者選考委員」に選出された。選考委員会は12月12日に開催され、鈴木中正氏が会長候補者として選出された。これにもとづき、12月13日の会員総会において、東南アジア史学会第9期会長に鈴木中正氏の就任が決定された。

（文責 土屋健治）

東南アジア史学会第26回秋季研究大会報告

東南アジア史学会第26回研究大会は、下記の通り開催されました。大会プログラムおよびシンポジウムの報告要旨は以下の通りです。

12月12日（土） 会場：学士会館本郷分館

＜研究発表＞

「現代タイ政治システムの一侧面」 富永哲郎（明大・院）

「ベトナム共産主義者の対華きょう政策の変せん」 古田元夫（東大）

「“ブスター・マス・サラテイン（王者の庭）”についての一考察」

白石さや（国際キリスト教大）

「フィリピン出土の中国陶磁器」

青柳洋治（上智大）

＜特別講演＞

「東南アジア発見の貿易中国陶磁について」

三上次男（東大・名誉教授）

12月13日（日）会場：学士会館神田本館

シンポジウム＜東南アジアの歴史と文学＞

「“スジャラ・ムラユ”－文学と歴史の間－」

中原道子（早大）

「王朝四代記」の文学と歴史

吉川敬子（AA語学院）

「納西族（ナシ族）に関する記録」

村井信幸（上智大・院）

シンポジウム総合討論

司会 川本邦衛（慶大）

コメント 生田滋（東洋文庫）、松山納（東外大）、市川健二郎（東京水産大）

斎藤達次郎（市郷学園短大）

Sejarah Melayu —マレー的世界観の展開—

中原道子

Sejarah Melayu は伝説とか歴史とか文学という範疇にとじこめることは出来ない。“文学”を意味する伝統的なマレー語Persuratan，“紙の上に書かれたもの”、つまり何であろうと言葉を媒介として表現されたものというのがふさわしい。歴史の資料としては、ポルトガル及び中国の資料により豊富で正確な情報を求めることが出来るが、Sejarah Melayuにはこれらに求めることが出来ないマレー人の世界観の展開を見ることが出来る。

Sejarah Melayuの最も重要なモチーフはマレー人の王権の観念である。この本が書かれた目的はマラッカの王権の正統性と王たちの系譜を明確にすることであった。アレキサンダー大王を始祖として連綿と継承される王の系譜 자체が重要なのであって、そこには国家という概念、歴史的時間の推移という概念は存在しない。次に現れるモチーフは王に対する忠節というマレー人にとって最も重要な倫理概念である。王への反逆はマレー社会では重大な罪であり、反逆者には死が与えられ、遺体は海に投げ込まれ、家の柱は抜かれ、屋根は地に落ち、その土地は掘り返されて海に投げ捨てられるのである。しかし王と臣下の関係は他の農耕社会に見られる絶対的な服従関係ではなく、理論的には両者の契約に基づくものであり、王には王たる行為が要求され、その王に対しての忠節が要求される。ただし、Sejarah Melayu 全篇に王への忠節が繰り返し語られている。この王と臣下（貴族）という世界には rakyat（人民）は存在しない。

最後に、Sejarah Melayu の世界には、過去から未来に継続するような歴史的時間の観念はない。歴史的な事件の羅列はあるが、それらは時間という観念で関係づけられているのではない。ここには空間的な移行、例えば、アレキサンダー大王の東征、ラジャ・チュランの海底の国ディカベの旅、タンジョン・プラの王子の漂流等それぞれ重要な表象を含む移行の例は豊富である。しかし、それらは歴史的な時間の観念から自由である。

Sejarah Melayuはマレー的な世界観の豊富な宝庫であるといえよう。

「王朝四代記」に於ける文学と歴史

吉川敬子

1. 視点

上記の標題の下に、タイ国現代の長篇歴史小説（原題：四代の治世 — Sii Phaendin）を題材に採り上げ、同書中に観る文学と歴史との関わり合いについて考えて行きたい。

2. 作品の執筆意図

本書は、女主人公メー・ブロイの四代の御世にまたがる生涯を描写しているが、著者ククリット・プラモートの執筆意図は、あくまでも「歴史」そのものにあるといってよい。即ち、西欧化に伴う急激な時代の変遷の中、ラーマ五世の御世に始まり、ラーマ八世の御世に至るまでの間に生きたさまざまな歴史的諸事件を、詳細に記述し、これを後の世に伝えることにある。ここで言う「歴史」とは、むしろ、歴史に埋もれている「歴史」的なるもの、つまり、当時のタイ一般人が歩み刻んだ日々の生活の諸記録、更には、歴史的な変化に際して、これに直面した人々が、いかに対処・適応したかを、能う限り、具体的に描くことに力点がおかれている。歴史の進行に伴う人々の生活変化の実際、価値意識の変革を、忠実に書きとどめる点が、作者のそもそもその執筆意図であったことが了解される。そして、まさに、この意味において、本書は、いわゆるタイ国正史の記述の範囲外にある諸々の出来事を理解する有用の「歴史」的資料たる価値を主張し得ると信ずる。

3. 構成と主題

本書の構成、並びに主題を、日本語版に準拠して採り上げると、およそ以下の如くになる。

第一巻 ラーマ五世時代 (1892~1899)	タイ国固有の伝統、習慣の克明な描写
第二巻 ラーマ五世時代 (1899~1910)	
第三巻 ラーマ六世時代 (1911~1925)	タイと西欧の文明比較
第四巻 ラーマ七世時代 (1926~1935)	
ラーマ八世時代 (1935~1939)	立憲君主制への移行に伴う人々の生活意識の変化
第五巻 ラーマ八世時代 (1939~1946)	
	第二次世界大戦下におけるタイ人の暮らしと対応

4. 作品評価

この作品の価値は、既述の如く、それぞれの御世に亘って生じた歴史的諸事象と、それらに対するタイ一般人の対応ぶりの丹念なる描写にある。また、各時代の様々な慣行・慣習の具体的な描写についても、いささかも手を抜いてはいない。言ってみれば、本書は、歴史、風俗、習慣、そして文化のあらゆる領域にまたがる「総合資料」とでもいって然るべきであろう。

5. 作品の限界

新聞小説連載という制約をまぬがれていません。読者の興味をつなぐための配慮が、作品中、到る處でなされているのも、このために他ならない。娯楽作品仕立ての作品であり、ともすれば、通俗

に墮する嫌い、必ずしも無しとしない。また、王族の肩書きを有する作者ククリット・プラモート自身の限界をも指摘せざるを得ない。確かに、タイ社会の特定階層に主軸を据え、上は王室、下は一般庶民にまで“公平”なる史眼を配することで、彼らを取り巻く歴史の必然を凝視する「局外中立者」たる立場をつらぬこうという意図は読みとれるものの、作者の王族としての自負の念、抜きがたい王室志向が、作品中、到る処に顔をのぞかせている。だが、作者のこのような王室愛慕の感情こそが、当時も、そして今も変わることのないタイ一般人の王室中心志向と合致・適合し、タイ人読者の圧倒的な支持を勝ち得て、本書を「現代の古典」たらしめたとも言えよう。

納西（ナシ）族に関する記録

— 木氏の系譜を中心として —

村井信幸

納西（ナシ）族はチベット・ビルマ系語族に属する中国少数民族の一つで、中国雲南省麗江納西族自治州を中心に、寧蒗彝族自治県、維西県、中甸県、永勝県及び四川省境域にも居住している。古くから農耕・牧畜をあわせて行ってきたが、現在は農耕が主である。人口は約三十万人（1980年現在）とされている。

この種族は往古より漢籍史料には“麼些”の名称であらわれている。近年においても、中国・欧米の研究者の間では“麼些” “Mo-So” の名称を用いることが少なくないが、新中国成立後は自称の“納西” “Na-khi” (Na = 黒い kyi = 人) を正式の民族名称としている。

納西族についての記述は、漢人の側からみた史料では 華陽國志 , 蛮書 , 旧唐書 , 新唐書 , 元史 , 大元大一統志 , 明史 , 大明一統志 , 皇明實錄 , 南詔野史 , 徐霞客遊記 , 雲南通志 , 繼雲南通志稿 , 四川通志 , 李京雲南志略 , 維西聞見錄 等にみられる。断片的なものが多く詳細な史実を知るには限界があるが、歴史的な史料としては貴重な存在である。

注目すべきことは納西族が彼ら自身で記した史（資）料を所有することである。これには彼ら固有の所謂納西文字（絵文字・音標文字）を使ったものと漢字によるものがある。これらの文字の使用的起源は明らかでないが、少なくとも明代に迄遡ることができる。納西文字は巫師 Dto-mba (多巴 , 東巴) が宗教儀礼に用いるもので、儀礼の間巫師は納西文字で書かれた經典を詠誦する。これらの經典は J. Bacot, B. Laufer, J. F. Rock, 傅懋勤、方国瑜、李霖燦、陶雲達、和志武等の研究者によって翻訳、整理されている。新中国成立後、納西族の伝承資料は他の西南中国少数民族と同様にさかんに収集されるようになった。これらの資料の中には Dto-mba 經典から採録されたもの、口頭の民間伝承を採録したもの、民間長詩、短歌（中には情歌、毛沢東への讃美歌等がある）等多種のものがある。これらを総合して中華人民共和国では「民間文学」として扱っている。

Rock, その他の研究者達によって、採集翻訳された納西族の伝承の中で最も関心の寄せられたものは“人の降臨”と題する經典である。これは納西族の創世神話であり、神々 demon 、及び人類の誕生が物語られる。そして、人類の始祖の兄弟姉妹による近親相姦が原因で洪水が起り、唯一人、皮鼓にかくれて難をのがれた男が天女と結婚し、その長男がチベット人、次男が納西族、三男が民家族（または白族）の祖となるというのがその梗概である。この物語は新中国成立後、和志武が Dto-mba 經典をもとに口頭伝承を参考にして、翻訳整理し、「人類遷徙記」の題名で『民間文学』1956年7月号（総第16期）に掲載している。

筆者がここでとりあげるのは、納西族自身が作成し、所持する史（資）料のうち、納西族の土司の木氏の系譜に関するものである。この木氏の系譜には次の五種類がある。①楊升庵木氏宦譜序、②木氏宦譜圖像世系考、③續雲南通志稿卷一百五十九 南蛮志 嘉靖詔附註之木氏宦譜、④木氏歷代宗譜碑、⑤玉龍山靈脚陽伯那（木氏賢子孫大族宦譜）。これらの系譜には歴代の諸土司及びその祖先の名とそ

に墮する嫌い、必ずしも無しとしない。また、王族の肩書きを有する作者ククリット・プラモート自身の限界をも指摘せざるを得ない。確かに、タイ社会の特定階層に主軸を据え、上は王室、下は一般庶民にまで“公平”なる史眼を配することで、彼らを取り巻く歴史の必然を凝視する「局外中立者」たる立場をつらぬこうという意図は読みとれるものの、作者の王族としての自負の念、抜きがたい王室志向が、作品中、到る処に顔をのぞかせている。だが、作者のこのような王室愛慕の感情こそが、当時も、そして今も変わることのないタイ一般人の王室中心志向と合致・適合し、タイ人読者の圧倒的な支持を勝ち得て、本書を「現代の古典」たらしめたとも言えよう。

納西（ナシ）族に関する記録

— 木氏の系譜を中心として —

村井信幸

納西（ナシ）族はチベット・ビルマ系語族に属する中国少数民族の一つで、中国雲南省麗江納西族自治州を中心に、寧蒗彝族自治県、維西県、中甸県、永勝県及び四川省境域にも居住している。古くから農耕・牧畜をあわせて行ってきたが、現在は農耕が主である。人口は約三十万人（1980年現在）とされている。

この種族は往古より漢籍史料には“麼些”の名称であらわれている。近年においても、中国・欧米の研究者の間では“麼些” “Mo-So” の名称を用いることが少なくないが、新中国成立後は自称の“納西” “Na-khi”(Na= 黒い kyi= 人) を正式の民族名称としている。

納西族についての記述は、漢人の側からみた史料では 華陽國志 , 蛮書 , 旧唐書 , 新唐書 , 元史 , 大元大一統志 , 明史 , 大明一統志 , 皇明實錄 , 南詔野史 , 徐霞客遊記 , 雲南通志 , 繼雲南通志稿 , 四川通志 , 李京雲南志略 , 維西聞見錄 等にみられる。断片的なものが多く詳細な史実を知るには限界があるが、歴史的な史料としては貴重な存在である。

注目すべきことは納西族が彼ら自身で記した史（資）料を所有することである。これには彼ら固有の所謂納西文字（絵文字・音標文字）を使ったものと漢字によるものがある。これらの文字の使用的起源は明らかでないが、少なくとも明代に迄遡ることができる。納西文字は巫師 Dto-mba (多巴 , 東巴) が宗教儀礼に用いるもので、儀礼の間巫師は納西文字で書かれた經典を詠誦する。これらの經典は J. Bacot, B. Laufer, J. F. Rock, 傅懋勤、方国瑜、李霖燦、陶雲達、和志武等の研究者によって翻訳、整理されている。新中国成立後、納西族の伝承資料は他の西南中国少数民族と同様にさかんに収集されるようになった。これらの資料の中には Dto-mba 經典から採録されたもの、口頭の民間伝承を採録したもの、民間長詩、短歌（中には情歌、毛沢東への讃美歌等がある）等多種のものがある。これらを総合して中華人民共和国では「民間文学」として扱っている。

Rock, その他の研究者達によって、採集翻訳された納西族の伝承の中で最も関心の寄せられたものは“人の降臨”と題する經典である。これは納西族の創世神話であり、神々 demon 、及び人類の誕生が物語られる。そして、人類の始祖の兄弟姉妹による近親相姦が原因で洪水が起り、唯一人、皮鼓にかくれて難をのがれた男が天女と結婚し、その長男がチベット人、次男が納西族、三男が民家族（または白族）の祖となるというのがその梗概である。この物語は新中国成立後、和志武が Dto-mba 經典をもとに口頭伝承を参考にして、翻訳整理し、「人類遷徙記」の題名で『民間文学』1956年7月号（総第16期）に掲載している。

筆者がここでとりあげるのは、納西族自身が作成し、所持する史（資）料のうち、納西族の土司の木氏の系譜に関するものである。この木氏の系譜には次の五種類がある。①楊升庵木氏宦譜序、②木氏宦譜圖像世系考、③續雲南通志稿卷一百五十九 南蛮志 嘉靖詔附註之木氏宦譜、④木氏歷代宗譜碑、⑤玉龍山靈脚陽伯那（木氏賢子孫大族宦譜）。これらの系譜には歴代の諸土司及びその祖先の名とそ

の諸事跡が詳細に記されている。これらの記述内容を検討・分析してみると次の通りである。上記①～⑤のうち内容に最も古い年代(Folk historyとしても)を含むものは④と⑤であり、記述は天地開闢から始まり、清代まで続く。①は唐武徳年間から明嘉靖年間まで、②は宋代から清代まで、③は唐武徳年間から南宋末までである。これらの系譜にあらわれる人名、史実は若干の出入異同はあるが、ほぼ共通している。④と⑤は天地開闢の時代から始まる。天地混沌の状態から卵があらわれ、人類が誕生し、洪水後の生き残りが天女を娶り、その長男がチベット人、次男が納西族、そして三男が民家族(または白族)の祖となる。つまり、前述の“人の降臨”を要約した内容である。次いで、次男の納西族の祖からさらに時代が降り、哥来秋の四子がそれぞれ東氏、葉氏、賈氏、何氏の祖となつたこと、木氏がこのうちの葉氏の系統をひく葉古年という唐武徳年間の人の子孫であることがのべられている。ここまでが神話・伝説的な時代であり、絵文字と漢字が混合して記されている。この葉古年以後がいわば歴史時代となり、その記述も漢文のみとなる。以後これらの系譜では木氏の祖先が唐代では南詔に、宋代では大理にそれぞれ服属し、南宋末にクビライの遠征軍に協力した情況、明洪武年間には阿甲阿得が明朝に服属して、土知府に任せられ、以後「木」姓を名乗るようになった情況が記されている。こうして系譜は清代まで続くが、元明以後の記述の内容・年代は正史、地方史ともほぼ一致し、歴代諸土司の代々の勲功と授与された官職、妻の名とその出自も明らかにされる。

この様に木氏の系譜は神話・伝説の時代(前半部)と中国史上の漢籍史料と比較検討が可能ないわば歴史時代(後半部)のおおよそ二つの部分から成る。フィクションとしての部分、つまり、「民間文学」の領域も、ノンフィクションとしての部分、即ち歴史学的史料も共に納西族の Folk history としては連続した歴史として登場するのである。系譜の前半は壮大な創世神話「人の降臨」と不可分の関係にある。「人の降臨」は一方において、数多くの宗教儀礼の中で詠誦されなければならないという機能を果たしている。新中国の現時点において、納西族の歴史と文学に関する位置づけは李霖燦の「釈麗江木氏宗譜碑」(『大陸雑誌』第九卷第三期、1954)や雲南省民族民間文学麗江調査隊編写『納西族文学史(初稿)』(雲南人民出版社、1960)にみられるが、従来の納西族における歴史や文学は神話、伝説、儀礼等宗教的な世界と不可分に結合しているのである。

従来、西南中国の諸民族の歴史研究は漢人側の資料に殆んど拠ってきたが、今後は少数民族自身の持つ資料を地方志の資料と共に、積極的に発掘、利用してゆくことが一層考えられてよいと思う。

『東南アジア — 歴史と文化 —』

第 11 号

目 次

【論 文】

- フィリピン糖業地帯形成史試論 — 19世紀後半のネグロス島を事例として 永野善子
両大戦間期日本綿織物の東南アジア進出 — 蘭領東インドを中心に 村山良忠
タイの対米英宣戦布告(1942年)をめぐる諸評価 市川健二郎

【研究ノート】

- ベトナム北部出土の青銅戈 松井千鶴子
明代彝族諸土司の形成と種族同定の淵源 — 彝族(ロロ・ノス族)研究の一考察 粟原悟
Sip Song Panna 王国(車里)の政治支配組織とその統治領域 — 雲南傣族研究の一環として 長谷川清

【書評・紹介】

鄭鶴声・鄭一鈞編『鄭和下西洋資料匯編』	小川 博
アブドゥッラー著、中原道子訳『アブドゥッラー物語—あるマレー人の自伝』	鈴木 佑司
生野善応著『ビルマ上座部仏教史—サーサナヴァンサの研究』	池田 正隆
ジョージ・オーウェル著、宮本靖介・土井一宏訳『ビルマの日日』	田辺 寿夫

【モンスーン=学界消息】

外務省外交史料館の東南アジア関係史料	長岡 新治郎
フランスの東南アジア（島嶼部）史の研究	永積 昭
S P A F A 「シュリーウィジャヤ研究集会」	仲田 浩三
『大南寢録』と影印本の刊行—その出版完結を記念して	和田 正彦
タイの仏教寺院壁画	杉山 龍一郎
シップ・ソーン・パンナー傣族の水利灌漑制度	加治 明
中国における農業史研究の動向	渡部 武

定価 3,000円 6月の大会で販売する予定です。

第12号の投稿について

既に論文2篇が予定されていますが、論文、研究ノート、書評、モンスーンへの投稿御予定の方は6月の大会までにおしらせ下さい。投稿〆切り日は9月末日です。なお、ローマ字はタイプ活字で打って下さい。

連絡先：〒108 東京都港区港南4-5-7 東京水産大学社会科学研究室 市川健二郎宛

昭和56年度 東南アジア史学会会計報告

昭和56年1月1日～昭和56年12月31日

収 入	支 出
前年度より繰越	郵 送 料 126,370円
会 費 収 入 646,250円	封筒料(学会名入) 10,690円
大 会 參 加 費 70,500円	会 報 印 刷 費 56,000円
論 文 目 錄 売 上 20,800円	大 会 経 費
『東 南 アジア 歴 史 と 文 化』 売 上 3,440円	室 料 135,360円
郵便貯金利子 10,094円	文 房 具 類 40,345円
計 1,059,892円	アルバイト料 41,000円
	懇 親 会 補 助 30,172円
	故 松 本 元 会 長 献 花 15,000円
	計 454,937円

翌 年 度 繰 越 604,955円
合 計 1,059,892円

以 上 会 計 桜 井 由 躁 雄 ◉

会計簿を点検し、間違いないことを確認いたしました。

昭和56年12月31日

会計監査 中村孝志 ㊞

各地区例会の活動状況

【関東例会】

関東地区では毎月最後の土曜日に研究会をしています。場所は学士会館本郷分館、時間は午後1時～4時です。定期的に案内を希望される方は、通信費500円を同封の上、つきのところへご連絡下さい。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東大文学部
永積 昭研究室、東南アジア史学会関東例会事務局

【関西例会】

1976年4月に12名の参加でスタートした関西例会は、この4月の第63会例会で7年目を迎える。最初は細々と行われていた例会も、会場を京大東南ア研に固定したこと、内容を「研究発表」に限らず「話題提供」として敷居を高くしなかったこと、歴代運営者の人柄と手腕（強引き？）、7月、12月のビヤパーティ（一部の人々の絶大な楽しみ）の恒例化などにより、飛躍的な成長を遂げた。81年度の参加者は平均29.5名（最高38名）、毎月の案内葉書発送数は170通を越えている。各回の話題も、高次の研究発表、学説整理と展望、現地調査の報告、学生の論文発表など極めて多彩で、昨年2月には50回記念として山本達郎先生を、5月には生田滋先生をお招きして、それでお話しいただくなどの特別企画も行っている。このほか昨年3月から一部メンバーで「漢籍を読む会」を構成して「通典」の南海関係記事を輪読しており、各国史の研究者に仏教学、地理学、言語学等の専門家を交えて、従来の研究を超える（？）幅広く斬新な討論を展開している。以上の様に大発展を遂げた関西例会の今後の問題は、手工業的な運営が規模の拡大によって限界に達しようとしていることであろう。（文責 桃木至朗）

昭和57年5月 発行

発行者 東南アジア史学会(鈴木中正)

住所 〒440 愛知県豊橋市町畠町1-1

愛知大学文学部 伊東利勝研究室

電話 <0532> 45-0441 内線295・311

郵便振替 名古屋7-56613 東南アジア史学会